

世代間関係における Generativity の可能性

- Narrative Approach の立場から -

西山 直子

1. はじめに

2009年7月に厚生労働省により発表された「平成20年簡易生命表の概況」によると、日本人の平均寿命は男性79.29年、女性86.05年と過去最高を記録した。また、65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合（高齢化率）も22.1%となり、世界に類を見ない水準に達している。「人生80年時代」と呼ばれる今日、人が生まれてから死ぬまでの生涯過程全般を見渡した生涯発達心理学（life-span developmental psychology）に関心が寄せられている。平均寿命の延びや高齢化の進行は、個人の一生の長期化のみならず、ともに生きる世代と世代との関係の長期化・重層化をも示唆している。たとえば親子関係を例にとると、いまや親子の間柄が50～60年という長期におよぶことも珍しいことではない。そのうちの半分近くの期間は、自ら親として子にかかわる一方で、同時に子としても老親にかかわるという「重層的な親子関係」が成立することになる（藤崎, 2000）。さらに、上下両世代との関係を含めて考えると、親子関係は個人の一生の全過程を覆うこともある。複数の親子関係が重なり合い、二代・三代もの異なる世代の生涯発達過程が同時並行的に進行しているのである。それでは、異世代間の関係性が以前よりも緊密になったかという点、そういうわけではなさそうである。むしろ、核家族化の進行・単独世帯の増加により家族の個人化が進み、世代間の交流は減少傾向にある。

このような現代社会の状況を鑑みて、世代間の結びつきを取り戻し、長期にわたる関係性をよりよきものとしていくためには、世代間関係研究においていかなる視点が有効であろうか。本稿では、この問題意識に基づき、まず世代間の関係性と伝達を扱ったこれまでの先行研究を概観し、その特徴を洗い出す。そのうえで、今後の研究に有用な視座を与えうる Narrative Approach の観点を導入する。さらに、世代と世代とを結ぶ概念として、ライフサイクル論者である E. H. Erikson の提唱した Generativity を取り上げ、Narrative Approach との関連を明らかにする。そして最後に、世代間の関係性における Generativity の可能性・有用性を探ることとする。

2. 関係性の世代間伝達の研究

本節では、関係性の世代間伝達を扱った研究を、アタッチメント理論を中心とした関連諸分野のなかでレビューする。

世代間関係の基礎とも言える親子関係の研究は、Bowlby（1969, 1973, 1980）以来、アタッチメント理論を中心として、発達早期の親子相互交渉の分析が進められてきた。その代表的なものとして、

Ainsworth et al.(1978)により開発されたストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure : 以下 SSP) がある。SSP では、養育者との分離と再会というストレス状況下に乳幼児を置き、そこで乳幼児が見せる様々な行動を観察する。そして、その行動上の差異から、乳幼児のアタッチメントを3ないし4タイプ (安定型・回避型・アンビヴァレント型に加えて無秩序型) に振り分ける。このSSPによる研究の隆盛は、発達早期のアタッチメント行動の測定に主たる関心が向けられ、それ以降のアタッチメントの発達を相対的に軽視することにもなってしまった (遠藤, 1992)。本来、Bowlby (1979) は、「揺りかごから墓場まで」の生涯発達過程全般を見通したパーソナリティ発達の総合理論としてアタッチメント理論を位置づけていたにもかかわらず、その中核概念である内的作業モデル (Internal Working Model : 以下 IWM) ⁱⁱの質を測定する具体的な手段の不在により、アタッチメント理論が実証的な意味で児童期以降の対人関係に適用されることは長らく稀だったのである (遠藤, 2006)。しかし、1980年代半ば以降、IWMに焦点化し、その特質を把握するための体系的な手法、成人愛着面接 (Adult Attachment Interview : 以下 AAI) (Main & Goldwyn, 1984; Main et al., 1985)が開発されてから、青年期・成人期の実証的なアタッチメント研究が本格的に取り組まれるようになった。このAAIの基礎には、養育者のIWMと子のアタッチメントとの関連性を問う世代間伝達の発想がある (Bowlby, 1988; 遠藤, 1992; 数井ら, 2000; 数井, 2006) ⁱⁱⁱ。Mainらは、個人に内在化されたアタッチメントに時間的連続性・安定性が存在すると仮定し、乳幼児のSSPにおけるアタッチメント行動のスタイルと、成人の示すアタッチメントスタイルおよび表象の間には何らかの対応性が存在すると考えた。そして、AAIの手続きを通して、つまり過去の養育者との間のアタッチメント経験およびその現在に対する影響などを半構造化面接により問うことによって、成人のアタッチメント表象を3ないし4類型 (自律型・アタッチメント軽視型・とらわれ型に加えて未解決型) に分類することを可能にした。乳幼児におけるSSPが現にそこにいる養育者に対する“物理的近接”の仕方を行動観察により測定するのに対して、成人におけるAAIは頭の中に想起された養育者に対する“表象的近接”のあり方をインタビューによって得られた語りから判断するのである (遠藤, 2006)。現在、アタッチメントの生涯にわたる連続性・不連続性や世代間伝達にかかわる研究においてAAIは主要な手法として積極的に用いられ、日本も含めた幅広い文化圏で数多くの有用な知見が積み重ねられている (e.g., Benoit & Parker, 1994; van IJzendoorn, et al., 1995; 平井・高橋, 2000; 数井ら, 2000) ^{iv}。

ここまで、関係性の特質がひとつの世代から次の世代へと受け継がれていくという世代間伝達の問題をアタッチメント研究の文脈の中で概観してきたが、この問題に対する関心は何もアタッチメントに限ったものではなく、様々な分野で古くから研究されてきたものである。精神分析においては、子ども時代の対人関係、特に親との早期の体験が後の対人関係に多大な影響を及ぼすという考え方は、S. Freudの発達理論の基礎をなすものであり、Horney (1933)をはじめとして、関係性のパターンが世代間を通して伝達されるという命題に対して、多くの研究者が取り組んできた (詳細は遠藤, 1992)。また、乳幼児精神医学の分野では、Fraiberg (1975)やLebovici (1988)により、親自身の無意識的な心的葛藤が世代を越えてその家に棲みつき健全な関係性の発達を阻害させてしまうとして、世代間伝達の概念が提示され、それをめぐる具体的な治療が意欲的に展開されてきた (詳細は田中, 2004; 鶴飼, 2000)。さらに、児童虐待については、Kempe et al. (1962)が「被虐待児症候群 (battered child syndrome)」という表現を用いて以来、「虐待された子が虐待する親になる」という虐待の世代間伝達の問題が多くの研究者の関心を引き、伝達率の算出や発生要因の検討、伝達メカニズムの解明、治療

的介入の方途など、実証的にも臨床的にも膨大な研究報告が累積している（詳細は遠藤, 1992; 鶴飼, 2000）。このように、親子関係を中心とした家族内の関係性の世代間伝達は学際的な問題・関心であり、これまでも様々な角度から考究されてきたといえよう。

3. 従来の世代間伝達研究の特徴と新しい視座の導入

前節では、アタッチメント理論を中心に関係性の世代間伝達を扱った研究を概観したが、ここでは、それら従来の研究が持つ特徴を2点取り上げ、それぞれに対して近年注目を集めている新しい視座の導入を試みたい。

3-1. 生涯発達過程全般を俯瞰した長期的な時間軸の必要性

まず、一点目として、従来の関係性の世代間伝達の研究では、精神分析・乳幼児精神医学・児童虐待・アタッチメント他いずれの分野においても、主要な関心は発達早期（特に乳幼児期）の被養育経験に向けられていた、という特徴があげられる。成人のアタッチメント表象のパターンを把握することを目的としたAAIにおいても、問われるのは幼児期における養育者との関係の記憶や出来事の想起、そして過去のアタッチメント関係が現在の対人関係に及ぼす影響であり、子ども時代の経験を重視している点では相違ない。むしろ、発達早期の被養育経験がその後の人の生涯発達において重要な意味を持つことを否定するわけではないが、過去の経験にこだわり特定のライフステージにのみ限定的な注意が向けられるのでは、長期にわたる世代間の関係性の質とその変化を問うのに十分でない恐れがある。冒頭に述べたように、長寿化による個人の一生涯の長期化とそれに伴う世代間関係の長期化・重層化は、各世代の生涯発達の全過程を俯瞰しつつ、「子として」の経験と「親としての」経験やそのありようを結びつける視点を求めている（藤崎, 2000）。

そのような長期的な時間軸を扱うのに有効なのが、Narrative Approach の観点である。Narrative Approach において、ナラティブ（物語）とは、「経験を有機的に組織化する行為（organization of experiences）、そしてそれを意味づける行為（acts of meaning）、すなわち経験や人生を編集する行為」をさす（Bruner, 1990; やまだ, 2006）。個々の要素・出来事・経験が同じでも、それらをどのように関連づけ、組織立て、筋立て、編集するかによって、人生全体の意味は大きく変化する（やまだ, 2006）。その意味づけに、語りが果たす役割を重要なものとみなす考え方が Narrative Approach の基礎にある。さらに、物語は、時空間を隔てた出来事を結びつける働きを持つ。離れた場所や文脈にある二つ以上の事象や出来事をむすびつけることで、新しい意味の生成が行われ、人生を変容させる（やまだ, 2006）。したがって、個人の一生涯のみならず世代と世代との関係性をも含みこんだ長期的な時間軸を扱うにあたり、過去から現在そして未来をつなぐ働きをもつ物語が生きてくるのである。

先に見た AAI においても語りがデータとして用いられているが、実のところ、それは分類のための道具にすぎず、ナラティブ（物語）として扱われているとはいいがたい。AAI の主眼は語りの詳細な分析にあるのではなく、アタッチメントパターンのコーディングにある。AAI により得られた語りは、すべて逐語的なトランスクリプトとして記録され、基本的にそれに基づいてアタッチメントパターンの評価がなされる。そのコーディングの最も重要な特質は、語りの“内容（content）”そのものというよりはむしろ、インタビュイーの語り全体を貫くその個人特有の“形式（form）”や“構造（structure）”

に重きを置くところにある (Hesse, 1999)。そのため、遠藤 (2006) が指摘するように、インタビューによって聴取・記録された語りデータに含まれる、過去から現在にかけての様々なエピソードやライフストーリーとも言うべき豊かな述懐は、類型化の陰に隠れて日の目を見ることはないのである。結果として、語りの内容に含まれるインタビューの思いや感情といった、関係性を捉えるうえで重要な要素は、分析の際に抜け落ちてしまうのである。AAI を用いた研究では捨象されてしまう、この語りデータの持つ豊かさを掬い取る方途としても、物語る行為と物語られた内容そのものを重視する Narrative Approach の観点は有効なのである。

3-2. 世代間伝達の肯定的・否定的両側面に目を向ける必要性

次に、従来の研究の特徴の二点目としてあげられるのは、「世代間伝達」という言葉によって想起される関係性は概して「良くない」「悪い」「崩壊した」ものであり、世代間伝達の負の側面に過度に注目が集まりがちな点である。上述の諸分野では、関係改善や治療的介入、臨床的支援を目的としているため、それらを必要とするような負の側面に焦点が当たるのはやむをえないことなのかもしれない。精神分析や乳幼児精神医学、児童虐待の研究が病理的な関係性を扱っているのはいうまでもなく、親子関係における養育の世代間伝達を問題にした AAI においても、どちらかといえば否定的なアタッチメントパターンの連続性に特別な関心が寄せられてきたといえるだろう (e.g., van IJzendoorn et al., 1995; Lyons-Ruth et al., 2003; Solomon & George, 2006)。

しかし、当然のことながら、世代間の関係性のすべてが断ち切られるべきもの、連鎖を食い止めるべきものばかりであるはずはない。世代間伝達の肯定的な側面に光を当てた研究、あるいは肯定的・否定的両側面を偏りなく中立的な立場から捉えた研究があってもいいのではなかろうか。ここで、我々が立ち戻るべき原点を確認しておきたい。それは、「命の世代間連鎖」という観点である。鯨岡 (2008) は、それまで自身が提唱してきた関係発達論 (鯨岡, 1999a; 1999b) の概念図を振り返るなかで、この観点を改めて提示している。「命の世代間連鎖」とは、「前の世代から命を引き継いで誕生した個が次世代に命をバトンタッチすることの反復、つまり命が世代から世代へと連鎖していく事実」(鯨岡, 2008) を示したものである。考えてみれば当たり前のことなのだが、「世代間伝達」といった場合にこの命の連鎖・生の継承といった基本的な前提が見過ごされてきたのではなかろうか。先行世代から命を受け継ぎ、生を紡ぎ、後続世代へと伝えていくことは、否定されるべくもない世代間伝達の本質である。問われるべきは、引き継いだ命をいかにはぐくみ育てていくか、そして次の世代へとつなげていくか、というところにある。この、「育てる一育てられる」という営みによって親・子・孫…と相前後する複数の世代が結び付けられ、それぞれの生涯発達過程が同時進行しているという考え方が関係発達論の基礎にある (鯨岡, 2008)。これは、冒頭に述べた人口学的変化に起因する現代の社会状況に照らし合わせても、重要な観点である。かつてはみなく育てられる者>であったということ、<育てられる者>が<育てる者>になるということ、「育てる」という営みを通して社会に生きる一人の人間として「育てられる」面もあるということ、そうした「育てる一育てられる」関係の世代間循環を、我々はいま一度見直すべきときにきているのかもしれない。

その際に有効となるのが、「育てる」「はぐくむ」「世話する」ことに真髓を置く Generativity (Erikson, 1950/1963) である。次節では、この概念について、提唱者である E. H. Erikson のライフサイクル論の枠組みに沿って詳述する。

4. 世代と世代とを結ぶ Generativity

Erikson は、初期の著作『幼児期と社会 (Childhood and society)』以来、「漸成的発達図式 (epigenetic chart)」を使って、独自の理論を展開してきた。このモデルは、人の誕生から死に至るまでの心理社会的発達を 8 つの段階 (stages) によって示し、これらを連続したひとまとまりとして「ライフサイクル」とするものである。この言葉には、二つの意味が込められている。ライフサイクルは、「個体のライフサイクル (the individual life cycle)」であると同時に、「世代間的ライフサイクル (the intergenerational cycle)」でもある。前者は、死によって完結する個人の一生涯を指している。後者は、一つの世代が前の世代に生み育てられ、また次の世代を生み育てるという世代継承的なライフサイクルを示している。従来の Erikson 理論の理解においては、このライフサイクルの二重性のうち前者の個体主義的な側面が強調され、「自立した個人の完成」を目指す個体発生の理論として片付けられるくらいであったが、Erikson のそもそもの定義に立ち返るならば、後者の関係論的な側面、すなわち「育てる一育てられる」という世代連鎖のなかで個人の発達を捉える視点の重要性が改めて浮き彫りになる (西平, 1993) 。

それでは、＜自己完結性＞を持つ個人のライフサイクルと＜世代連鎖性＞を帯びる世代間のライフサイクルの二つを結びつけるのは一体何であるのか。Erikson et al. (1982) によれば、それこそが Generativity なのである。Generativity とは、generate (生み出す) と generation (世代) とを掛け合わせた Erikson の造語で、子孫を生み出すこと (procreativity) や生産性 (productivity)、創造性 (creativity) といった類似概念を包摂するものである。先の「漸成的発達図式 (epigenetic chart)」においては、第 7 段階 (成人期中期) の心理社会的危機に位置づけられる。初期の著作 (Erikson, 1950/1963) において、Erikson はこの Generativity を「次の世代を確立させ、導くことへの関心 (the concern in establishing and guiding the next generation)」であるとしていた。ライフサイクル論の展開と軌を一にしてこの概念も拡がりを見せ、後期の著作 (Erikson et al., 1982) においては、「(自分自身の) 更なる同一性 (identity) の開発に関わる一種の自己 - 生殖 (self-generation) も含めて、新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出すこと」と定義し直している。

ここで注意しておきたいのは、Generativity が単独で成立するものではなく、対となる命題を伴って示されている点である。人格的成熟がうまくいかない場合には、自分にしか関心が向かず、あたかも自分が自分自身の子どもであるかのように振る舞い、人間関係は貧困になり、他者に積極的に関与しようとしなくなる。それが、Generativity の対立命題としてあげられる停滞 (Stagnation) であり自己 - 耽溺 (self-absorption) の状態である。これらの相克・葛藤を乗り越えてはじめて、Care (世話) という virtue (徳) が得られる。ここでいう“Care”とは、「これまで大切に (care for) してきた人や物や観念の面倒を見る (take care of) ことへの、より広範な関与」(Erikson et al., 1982) のことである。Generativity の本質ともいうべき世話することの経験が、各人生段階をまとめてひとつの人生のサイクルを創り出し、さらには、その世代に生命を与えた世代 (親世代) とその世代が生命を育む責任のある世代 (子世代) の三代を結びつけ、世代的ライフサイクルを創り出すという (Erikson et al, 1986)。

彼自身によるこれらの説明を参考にしつつ、本邦においては多くの研究者が Generativity に対して

様々な解釈と訳語を当ててきた。たとえば、西平（1993）は「生殖性」という訳語を当てながらも、単なる生産性以上の含意を持つものとして、「人類という種族、次の世代を生き生きと産み育ててゆくこと」と説明している。また、岡本（2007）はこれを「世代性」と訳し、「達成された自らのアイデンティティでもって他者を支え育てること」としている。岡本（2007）はさらに、Generativity が達成されるための特質として、①他者へのアイデンティティの投企（確立されたアイデンティティでもって他者へコミットすること）②無我性（自己中心的でない他者への関心と関与）の二つが不可欠の要素であると詳述している。一方、やまだ（2002, 2003）は、Generativity の世代と世代とをつなぐ働きに注目して、同じものをつなぎながら（継承）新しいものを生み出す（生成）という意味をこめて「生成継承性」と訳している。

本稿においては、いまだ訳語の定まらないこの語を「Generativity」と原語のまま表記している。それは、Erikson がこの言葉に込めた多義的な意味合いを尊重したいからである。特に、「生み出す」「育てる」「はぐくむ」「つなぐ」といった世代と世代とを結び関係性をつくる働きに主眼を置くため、基となった generate と generation の響きの残る原語をそのまま用いることとした。そのうえで、この言葉を「次の世代をはじめとする、自分が生み出したものや創り出したものを気づかい見守りはぐくんでゆく」ものとして捉え、個人を越えて世代と世代とをつなぎ、長い時間軸で将来世代をケアし責任を果たしていくために必要な概念（やまだ, 2003）として位置づけ、注目している次第である。

5. Generativity と物語との結びつき

それでは次に、世代間関係における「育てる一育てられる」という営みの根本に位置づけられる Generativity と、先に見た Narrative Approach における物語とがどのように結びつくかを考えてみたい。それは、Generativity に関する研究がどのように発展してきたか振り返ることによって可能になる。

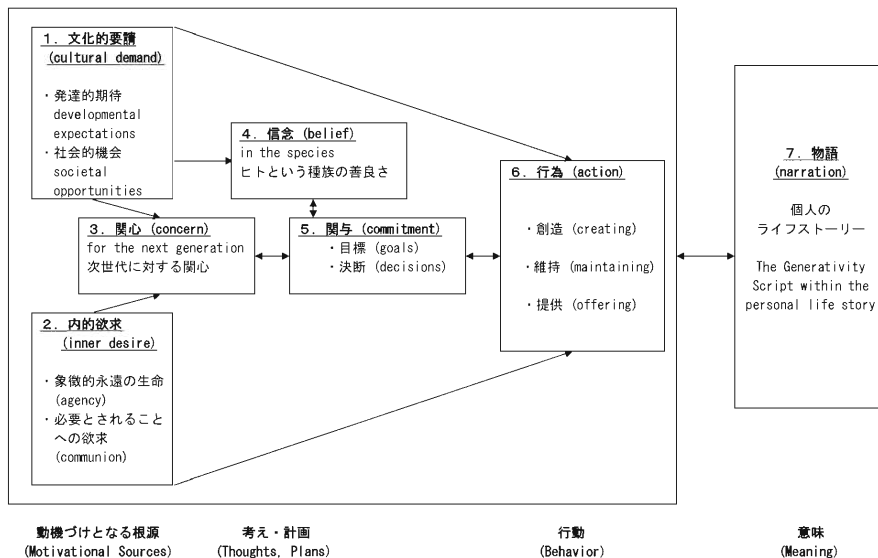


図1 Generativity の7つの構成要素 (McAdams et al, 1992 より作成)

前節で確認したように、Generativity は世代連鎖を重視する Erikson のライフサイクル論の中核となる概念であるが、その多義性ゆえに概念規定や研究方法の設定が困難で、研究対象とすることの難しさが指摘されてきた（丸島, 2000; de St. Aubin et al, 1995）。しかし、1980 年代に入り、Ryff et al. (1983)や McAdams et al. (1986)に見られるように、成人期に特に着目し Generativity に焦点を当てた実証研究が報告されるようになってきた。それらの研究の蓄積を受けて、McAdams et al. (1992, 1998)は、Generativity の多義的な要素を関連づけてひとつの全体像として理論構成することを試み、概念モデルを創り上げた。それが、図 1 である。

このモデルは、Generativity を 7 つの要素（心理社会的特徴）に分解して、それらがどのように構成され、互いに関連し合うかを示したものである。彼らの説明によると、最初の二つの特徴すなわち（1）文化的要請（cultural demand）と（2）内的欲求（inner desire）は、Generativity の動機となる根源である。それらは組み合わさって、成人期において、次世代に対する（3）関心（concern）を促進する。関心は、ヒトという種の善良さに対する（4）信念（belief）に支えられて、生成的な（5）関与（commitment）を活発にさせる。この生成的な関与は、信念と関心に対して相互に影響を与え合うものである。そして、生成的な（6）行為（action）は直接的に文化的要請と内的欲求とに動機づけられて、関与に起因して生まれるものである。と同時に、何かを創り出したり、支え保ったり、他者に提供したりというような行動を含む生成的な行為は、次なる関与と相互に影響を与えあう。最終的に、これまで見てきた文化的要請、内的欲求、関心、信念、関与、行為という互いに密接に関連した 6 つの要素の複合が個人においてどのような意味をもつかは、（7）物語（narration）によって決まる。物語は、Generativity の多義的な要素を組織立て、相互に関連させる意味づけとして働くのである。いかなる人の人生も、特定の社会的・歴史的文脈のなかに埋め込まれているため、これらの 7 つの要素はそれぞれの個人に固有の主観によって自己規定的に組織立てられ、結びつけられ、ストーリーを構成する。

ここにて、Generativity と物語とが結びつくことがわかる。Generativity は、次世代に対する関心や関与、何かを生み出し支え維持する行為といったものすべてをつなぐ物語の形成に至る一連の過程であり、このように物語ることが人生に一貫性と目的と意味とを与えるのである。再度強調していえば、個々の要素が同じでも、それをどのように関連づけ組織立て筋立てるかによって、人生全体の意味は大きく変化する（やまだ, 2006）。たとえば、子ども時代に虐待や無関心などで満足のいく養育が受けられなかったとしても、「だから自分は生きる価値のない駄目な人間なんだ」と思うか、「それでも生き抜いた自分は強いうえに人の痛みもわかる大人になれたのだ」と思うかによって、その後の生き方や他者へのかかわり方が変わってくるだろう。自らが受けた負の体験を引きずり同じような仕打ちを次の世代にも与えてしまうか、それをバネに強さと優しさを兼ね備えた大人として次の世代をはぐくんでいくことができるかは、人が経験をどのように組織し物語るかにかかっている。過去の事実は変えられなくとも、物語を語ること／語りなおすことで、ものの見方を変えることができれば、現在や未来を自分の力で切り開いていくことが可能になるのである。

従来の研究において注目を集めてきた世代間伝達の負の側面、とりわけ否定的アタッチメントパターンの連続性・不連続性の問題に関しても、Generativity を Narrative Approach の観点から捉えることは有効である。たとえば、養育者との間に否定的アタッチメントパターンを築き対人関係において好ましくない IWM を持つにいたった人の経緯を、物語によって丁寧に辿ることを通して、経験の

組織の仕方・意味づけ方を見直し、ひいては世代間の関係性の取り結び方を変えることができるかもしれない。あるいは逆に、同じように養育者との間に否定的アタッチメントパターンを持つにもかかわらず、安定した対人関係を築き次世代との間で高い Generativity を発揮している人が、どのように自らの経験を意味づけ人生の物語を構成しているかを知ることが、世代間伝達の負の側面を克服し新たに命の世代間連鎖を生み出すための参考になるであろう。

McAdams et al. (1992)も、Generativity を構成する7つの要素は、個人の置かれた社会的・歴史的な文脈によってそれぞれに固有の様式を見せるため、個人の人生における Generativity の特質を理解するためには、それらの構成の仕方（すなわち、物語られ方）を判断・解釈・評価する必要があると主張している。そして、彼らは、Kotre (1984)が成人の自伝的エピソードを質的に分析することによって Generativity の人生における意味を明らかにしたように、より「厚い記述 (thick description)」を基にした研究の推進を強く求めている。こうした訴えにもかかわらず、その後、我が国においては、Generativity を測定する尺度を利用した研究（丸島, 2000）やそうした尺度開発を目的とした研究（串崎, 2005a; 丸島, 2005）は進められているものの、筆者の知る限り、Generativity の物語的側面に着目した研究はほとんど行われていない。わずかに、串崎 (2005b) が自由記述の分析により Generativity の感覚と人生に対する態度との関連性を見ようと試みている程度である。

6. 世代間関係における Generativity の可能性

本稿では、現代の長期化・重層化した世代間関係を研究するうえで、長期的な時間軸を扱うことのできる Narrative Approach の視点の有用性と、「育てる―育てられる」という営みの世代連鎖の根幹にある Generativity の重要性、そして、それら二つが組み合わさることで従来の研究知見に対していかなる貢献ができるか考察してきた。最後に、世代間関係における Generativity の可能性を示して本稿の結びとしたい。

Erikson (1950/1963) は、Generativity を成人期中期の心理社会的発達課題として提示したが、個人を越えて世代と世代とを結ぶ働きは、何も特定のライフステージに限定されるわけではない。最近では、個人の生涯発達過程におけるそのほかの段階・年齢層でも Generativity が様々なかたちで存在することが証明されてきている (McAdams, 2001; Frensch et al., 2007, Urrutia et al., 2009)。実際、他の年代に比べて中年期において Generativity が最も突出していることを部分的に支持する研究 (McAdams et al, 1993)がある一方で、中年期以降の Generativity の発達を示唆する結果 (丸島, 2000; Urrutia et al., 2009) や、あるいは逆に中年期以前の成人前期や青年期後期に世代継承的な関心を示す報告 (Ackerman et al, 2000; Lawford et al, 2005) も提出されている。これらの結果から、Generativity をある特定のライフステージに特有のものと固定的に考えるのではなく、世代と世代とが関係をもつなかで両者（あるいはそれ以上の複数の他者）を結びつける力、関係性をつなぐ働きとして幅広く捉えたほうが生産的である。

また、Generativity の概念を循環的な時間構造のなかで拡張させた Yamada (2004) によれば、世代継承的な世話や関心は未来の世代や社会だけでなく過去の世代や社会に対しても向けられるべきものであることが示唆されている。世代間関係が輻輳する現代社会において、すべての世代が尊重されるべきであり、将来世代のみならず先行世代に対しても責任を果たしていくことが求められている。

過去から現在、現在から未来へと向かう直線的で一方向的な時間概念のなかで Generativity を捉えるのではなく、回帰・循環・往還といった多様で多次元の時間軸を設定できる物語の強みを生かして柔軟に捉えることで、さらなる発展が期待できる。

以上見てきたように、Generativity は個人と社会、世代と世代とを結びつける概念、受け継がれてきた命を将来につないでいくために必要な概念としてきわめ有効である。非婚化・晩産化・少子化の進む現代社会にあって、人々の生き方はますます多様になってきている。それに伴い、Generativity の発揮の仕方も、単に自分の子どもを産み育てるばかりでなく、仕事上で後進の育成に励む、後世に残る作品を創る、など多岐にわたる。このような多様性を掬い取るためにも、ひとり一人が経験を意味づけ構成する物語として Generativity を扱い、丁寧に聞き取ってゆく Narrative Approach の視点を取り込んだ研究が今後さらに進められるべきであろう。

参考文献

- Ackerman, S., Zuroff, D. C., & Moskowitz, D. S. (2000). Generativity in midlife and young adults: links to agency, communion and subjective well-being. *International Journal of Aging and Human Development*, 50 (1), 17-41.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Benoit, D., & Parker, K. C. H. (1994). Stability and transmission of attachment across three generations. *Child development*, 65, 1444-1456.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol. 1, Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss: Vol. 2, Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1979). *The Making and Breaking of Affectional Bonds*. London: Tavistock.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss: Vol. 3, Loss*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. New York: basic Books.
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press. [岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子[訳]. (1999). *意味の復権——フォークサイコロジーに向けて*. 京都：ミネルヴァ書房.]
- 遠藤利彦. (1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. *東京大学教育学部紀要*, 32, 203-220.
- 遠藤利彦. (2006). 語りにおける自己と他者、そして時間——アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質——. *心理学評論*, 49, 470-491.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton & Company.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society: second edition*. New York: W. W. Norton & Company. [仁科弥生[訳]. (1977-1980). *幼児期と社会*. 東京：みすず書房.]
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M. (1982). *The Life Cycle Completed: A REVIEW*. New York: W. W. Norton. [村瀬孝雄・近藤邦夫[訳]. (2001). *ライフサイクル、その完結 (増補版)*. 東京：みすず書房.]
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton.

- [朝長正徳・朝長梨枝子[訳]. (1990). *老年期——生き生きしたかわりあい*. 東京：みすず書房.]
- Fraiberg, S. (1975). Ghosts in the nursery. *Journal of American Child Psychiatry*, 14, 387-422.
- Frensch, K. M., Pratt, M. W., & Norris, J. E. (2007). Foundations of generativity: Personal and family correlates of emerging adults' generative life-story themes. *Journal of Research in Personality*, 41(1), 45-62.
- 藤崎宏子[編]. (2000). *親と子：交錯するライフコース*. 京都：ミネルヴァ書房.
- Hesse, E. (1999). The Adult Attachment Interview: Historical and current perspectives. In Cassidy, J. & Shaver, P. R. (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp.395-433). New York: Guilford Press.
- 平井美佳・高橋恵子. (2000). 日本人における Adult Attachment Interview の妥当性の検討—文化比較の視点から—. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 42, p24.
- Horney, K. (1933). Maternal conflicts. *American Journal of Orthopsychiatry*, 3, 455-466.
- 数井みゆき. (2006). アタッチメントの世代間伝達. *そだちの科学*, 7, 96-100.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹. (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達. *教育心理学研究*, 48, 323-332.
- Kempe, C. H., Silverman, F. N., Steele, B. B., Droegemueller, W., & Silver, H. K. (1962). The battered child syndrome. *Journal of the American Medical Association*, 181, 17-24.
- Kotre, J. (1984). *Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- 厚生労働省. (2009). 平成 20 年簡易生命表の概況について. 2009 年 7 月 16 日公表.
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life08/index.html>).
- 鯨岡峻. (1998). *両義性の発達心理学*. 京都：ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻. (1999a). *関係発達論の構築*. 京都：ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻. (1999b). *関係発達論の展開*. 京都：ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻. (2008). 関係発達という考え方 (1)：生涯発達過程を考える (子どもは「育てられて育つ」—親と子の関係発達を考える—). *教育と医学*, 56 (8), 774-782.
- 串崎幸代. (2005a). E. H. Erikson のジェネラティヴィティに関する基礎的研究：多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して. *心理臨床学研究*, 23 (2), 197-208.
- 串崎幸代. (2005b). ジェネラティヴィティの感覚と人生に対する態度の関連について. *心理臨床学研究*, 23 (5), 591-596.
- Lebovici, S. (1988). Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. *Infant Mental Health journal*, 19(1), 10-18. [小此木啓吾 [訳]. (1991). 幻想的な相互作用と世代間伝達. *精神分析研究*, 34 (5), 285-291.]
- Lyons-Ruth, K., Yellink, C., Melnick, S., & Atwood, G. (2003). Childhood experiences of trauma and loss have different relations to maternal unresolved and hostile–helpless states of mind on the AAI. *Attachment & Human Development*, 5, 330–352.
- Main, M., & Goldwyn, R. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript. Berkeley: University of California.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of

- representation. In Bretherton, I. & Waters, E. (Eds.) *Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- McAdams, D. P. (2001). Generativity in midlife. In M. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development* (pp. 395-443). New York: Wiley.
- McAdams, D. P., Ruetzel, K., & Foley, J. M. (1986). Complexity and generativity at mid-life: Relations among social motives, ego development, and adults' plans for the future. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 800-807.
- McAdams, D. P. & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015.
- McAdams, D. P., de St. Aubin, E., & Logan, R. L. (1993). Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, 8 (2), 221-230.
- McAdams,D.P., Hart,H.M. & Shadd Maruna. (1998). The Anatomy of Generativity. McAdams,D.P. & Aubin,E.S. (Eds). *Generativity and adult development: How and Why We Care for the Next Generation* (pp.7-43). Washington, DC: American Psychological Association.
- 丸島令子. (2000). 中年期の「ジェネラティヴィティ (Generativity)」の発達と自己概念との関連性について. *教育心理学研究*, 48 (1), 52-62.
- 丸島令子. (2005). 世代性尺度の作成：世代性の関心と行動モデルの測定. *心理臨床学研究*, 23 (4), 422-433.
- 西平直. (1993). *エリクソンの人間学*. 東京：東京大学出版会.
- 岡本祐子. (2007). *アイデンティティ生涯発達論の展開*. 京都：ミネルヴァ書房.
- Ryff, C. D., & Heincke, S. G. (1983). Subjective organization of personality in adulthood and aging. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(4), 807-816.
- Solomon, J., & George, C. (2006). Intergenerational Transmission of Dysregulated Maternal Caregiving: Mothers describe their upbringing and childrearing. In O. Mayseless (Ed.), *Parenting Representations: Theory, Research, and Clinical Implications* (pp. 265–295). New York, NY: Cambridge University Press.
- de St. Aubin, E. & McAdams, D.P. (1995). The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/happiness with life and ego development. *Journal of Adult Development*, 2, 99-112.
- 田中千穂子. (2004). 「世代間伝達」の功罪. *教育と医学*, 52 (5), 13-22.
- 鶴飼奈津子. (2000). 児童虐待の世代間伝達に関する一考察：過去の研究と今後の展望. *心理臨床学研究*, 18 (4), 402-411.
- Urrutia, A., Cornachione, M. A., de Espanés, G. M. Ferragut, L., & Guzmán, E. (2009). The Culminating Point of Generativity in Older Women: Main Aspects of Their Life Narrative. *Forum: Qualitative Social Research*, 10(3), Art. 1.
- van IJzendoorn, M. H., Juffer, F., & Duyvesteyn, M. G. C. (1995). Breaking the intergenerational cycle of insecure attachment: A review of the effects of attachment-based interventions on maternal sensitivity and infant security. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 36, 225-248.
- やまだようこ. (2002). 12. 成人後期：世代を育み伝える. [小嶋秀夫・やまだようこ編著], *生涯発達心理学*.

東京：放送大学教育振興会。]

やまだようこ。(2003)．訳語について（生成継承性 generativity の項）．[フリードマン,L.J.[著]．エリクソンの人生：アイデンティティの探求者．やまだようこ・西平直[監訳]．東京：新曜社．]

やまだようこ。(2006)．質的心理学とナラティヴ研究の基礎概念—ナラティヴ・ターンと物語的自己—．*心理学評論*, 49 (3), 436-463.

Yamada, Y. (2004). The Generative Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and Generativity.

In de St. Aubin, E., McAdams, D. P., & Kim, T-C. [Eds.] *The Generative Society: Caring for Future Generations*. (pp. 97-112). Washington, DC: American Psychological Association.

i “attachment”とは、現実世界で、あるいは潜在的な状況において危機や不安を感じたときに、特定の大人（養育者）との近接を求め維持しようとする個体の生まれながらの傾向を意味する。この近接関係の確立・維持を通して、自らが「安全であるという感覚」（felt security）を確保しようとするところにその本質がある。数井（2006）は、「愛着」という言葉が、もともとボウルビーが提唱した“attachment”の本来の意味よりも拡大解釈されている現状を危惧し、「アタッチメント」と片仮名表記している。本稿でも、これにならって片仮名表記を採用する。

ii 子どもは、満2歳前後より、それまでアタッチメント対象との間に経験した関係の質に応じて、アタッチメント対象への近接可能性やアタッチメント対象の情緒的応答性等に関する主観的確信、自己と他者の関係性全般に関する一般化された表象、つまり「内的作業モデル（internal working model）」を構成するに至ると考えられている。そして、たとえ他者に物理的に近接することが叶わなくとも、自己のなかに内在化した他者のイメージに表象的に近接することによって（内的作業モデルを潜在的に活用することによって）、みずから安心感を確保し、情動を制御し、心身の恒常性を維持することが可能になってゆくのである（数井ら、2000；遠藤、2006；数井、2006参照）。

iii 数井（2006）は、アタッチメントの世代間伝達を考える際に、異なる3つの基本的立場があることを指摘している。その3つとは、まず、「第一世代の過去のある特質が、第二世代の現在の同特質と連続性を有する」とする立場。二番目に、「第一世代の現在のある特質が、第二世代の現在の同特質と連続性を有する」とする立場。そして三番目に、「第一世代の現在のある特質が、第二世代のある別の特質と特異的な関連性を有する」とする立場である。そこで、現実にはアタッチメント研究において問題にされる世代間伝達とは、第二あるいは第三の、「現在の親のアタッチメントにかかわる表象が、子どものアタッチメントにどのような影響をもたらすか」という意味になる。すなわち、「親の現在の心的状態が子どもの現在の状態に影響を与える」というものである。

iv アタッチメント理論およびAAIに関する研究について詳細は遠藤（1992, 2006）、数井ら（2000）、数井（2006）をご参照いただきたい。なお、本稿におけるアタッチメントの世代間伝達に関する研究の概観は、これらの文献を参考にして整理したものである。先人たちの詳細かつ精緻な議論に敬意を表するとともに、今後のアタッチメント研究の更なる発展に期待を寄せている。

v このような、『一方で個人の発達を見ながら、他方ではその発達を世代関係のなかで見、いわば個性と関係性とのジレンマをジレンマのまま人生のありのままの実相に目をとめようとする』（西平、1993）ものの見方は、鯨岡（1998, 1999a, 1999b）が提唱する関係発達論における人間存在の根源的両義性の概念と相通ずるものがある。

（日本学術振興会特別研究員 教育方法学講座 博士後期課程1回生）

（受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日）

A Narrative Approach to Generativity in Intergenerational Relationships

NISHIYAMA Naoko

Increasing longevity has resulted in the establishment of long-term intergenerational relationships among family members. The life-span of one person often overlaps with those of members of both former and future generations. Most studies addressing relationships among generations have tended to focus on the past experiences during the earlier period of childhood and the negative aspects of intergenerational connections. In this study, I plan to adopt two perspectives on intergenerational relationships. The first perspective uses a narrative approach, and the second assumes the perspective of the intergenerational life cycle. The narrative approach offers a longitudinal perspective that includes not only the life-spans of individuals, but also the entire period encompassed by the intergenerational life cycle. The concept of generativity (Erikson, 1950) is useful for connecting the individual with the intergenerational life cycle. McAdams et al. (1992) viewed generativity as a configuration comprised of seven psychosocial features: cultural demand, inner desire, concern, belief, commitment, action, and narration. These scholars underscored the last feature, narration, which organizes the story created by the adult for the next generation. In this way, the integration of the narrative approach with the concept of generativity offers promising directions for the study of intergenerational relationships.